

豊かさを問い直す体験をして

森 永 由 紀

ラオスの基本情報

ラオス（正式名称：ラオス人民民主共和国）は、日本で知名度が高いとは言えないので最初に基本情報から述べる。ラオスはインドシナ半島の中央部に位置し、5か国に囲まれて南北に細長くのびるASEAN加盟国で唯一の内陸国である。周辺国は時計まわりに北に中国（雲南省）、東にベトナム、南にカンボジア、西にタイ、北西にミャンマーがある。チベット高原を源流とするメコン川の下流部にあたり、メコン川は細長いラオス国内を縦に1,900km流れ、ところどころタイとの国境となっている。南はサバンナ気候、北部は熱帯モンスーン気候で、高温多湿で雨季（5～10月）と乾季（11～4月）があるが、北部の山岳部には一部温暖冬季少雨気候もある。

国土の大きさは23.7万km²（日本の本州ぐらい）で高地が多く、豊かな森林に恵まれている。メコン川のほとりにはわずかな平地があり、首都ビエンチャンもタイとの国境付近の平地にある。平地が少ないために人々が国土に分散して暮らしているのが特徴である。民族の構成をみると約半分が低地ラオ族で、公式には計49民族が共存しているとされる多民族国家である。人口は649万人、ビエンチャンの人口は83万人で、都市化率は2割強とアジアの中でも低い(2015年)。

1975年にベトナム戦争が終了し、ラオス人民革命党による社会主義政権が誕生したが、宗教は仏教が生活に深く根ざしているし、一党独裁下での市場経済化も進められている。産業はGDPの割合で見るとサービス業が39.4%、鉱業が29.5%、農業が22.7%となっているが、従事者で見ると農業従事者の割合が約8割と高く、農業中心のゆったりとした暮らしぶりがみられる（JETRO、2016）。一方、実質GDPの成長率は90年代以降大きく伸びはじめ、最近は下降気味になったとはいえ2015年も7%台で伸びている。貧困率は2003年の33.4%から2013年の23.2%に改善した(世界銀行、2014)。近年の経済成長の原動力となっているのは、水力発電と鉱山開発及び外国人相手の観光産業である。特に水力発電では、水量が豊かなメコン川に作られたダムからできる電力を国外に売って外貨を得ている。

メンバー

今回のラオス派遣団のメンバーの構成は、ユースリーダー（YL）とアシスタントユースリーダー（AYL）が大学院生で、他の12名は学部生、それに熊谷副団長と団長の私を加えて総勢16名である。最近の若者は内向き志向だとよく言われるが、アクティブな14名が北海道から沖縄まで全国をまたがってよくぞこれだけ集まったと思う。こうして原稿を書きながらも彼らのにこやかな顔がにぎやかな声とともに浮かんでくる。

初めて顔を合わせた7月の事前研修では、多様なプログラムを受講しながらメンバー同士の話し合いも重ねた。研修はまさにice breakingという感じで、最初は緊張していたメンバーが徐々に打ち解け、団別研修の最後に全員でホワイトボード前に集まりラオス派遣団の目標を決めていく時の熱気には圧倒された。

そのようにして生まれた目標は「私たちが紡ぐ輪、私たちが織り成す未来」という言葉にまとめられ、相手国について何かを学ぶときには日本についても学びなおす、先入観にとらわれずに自分の目で見ると、などもあわせて心がけようと話し合われた。紡ぐ、織るという語はラオスの伝統工芸である織物に関連付けたものだが、機織りが盛んな現地では、その伝統的な機能美が今も生活の中に息づく様子に魅了された。



7月の国立オリンピック記念青少年総合センターの事前研修にて

交換日記でつながった自主研修中の2か月間

7月の事前研修中にYLとAYLの人選のほか、それぞれが役割（記録、ディスカッション、日本文化紹介）を決め、2か月後の出発までに何をを用意するかを話し合った。メンバーは一人一人がユニークであったが、誰もが互いを尊重する点は共通しているので、息のあったチームができあがっていった。研修当初にはあった不安も消えたようで、国立オリンピック記念青少年総合センターを後にする最終日の6日目には、早くも一抹の寂しさを感じるほどであった。ただ、彼らはアクティブであるだけに、自主研修中である夏休み中もそれぞれが多忙である。私はこれほどの派遣事業が彼らの忙しい日常の中でただのone of themとなってしまうのは、あまりにも惜しいと内心感じていた。そして、これからの自主研修を終える2か月後には何よりも全員が揃って元気に出発しないといけない。そこで自主研修中にもラオスの研修を楽しみに、それに少しずつ備える作業を通して「ラオス脳」になって出かけよう！と提案した。そして、Facebookで交換日記と称してメンバーが交代でラオスの話題提供をすることになり、3周ぐらい回ったところで出発となったが、ここでずいぶんラオスの予習ができたし、全国に散らばっていてもラオスへの思いが共有できたと思う。7月の事前研修の最後に中村かおり参事官から頂いた「ラオスを知る日本人はまだまだ限られているので、皆さんは『ラオスの達人』をめざしてください」というエールを、メンバーはずっと大切にしておくことになる。この日記は帰国まで続き、ラオス派遣団のFacebookは帰国後もアクティブな彼らの様々な情報交換の場になり、ラオスの輪を紡ぎ続けている。

到着

9月9日夕刻、ビエンチャンにベトナムのハノイ経由で降り立った。現地コーディネーターのジュイさんらに笑顔で出迎えられ、バスで十数分の市街地にあるホテルに向かう。大通りを走るバスの車窓からは、植民地時代の香りの残る洋風の建物と立派な寺院が立ち並ぶのが見える。9月6日から9日までのASEANサミット開催中は警備強化のために学校等も臨時で休みになったという街のあちらこちらには、「ASEAN関係者歓迎」と記された旗や看板が掲げられていた。ASEAN議長国を務めていた熱気のあるこの時期に、ラオスと日本の青年の国際交流が始まった。ラオス派遣団の私たちは、ビエンチャンから北部の都市ルアンパバーンに移動し、再びビエンチャンに戻る行程、18日間のなかで現地の青年たちと交流を重ねていった。

今回のコーディネーターである（一財）青少年国際交流推進センターの大久保正美さんが厳選して下さった訪

問先は、どこも私たちに多くの気付きを与えてくれた。ラオス側の受入母体は、ユースユニオンと呼んでいたラオス人民革命青年同盟であり、ラオス人民革命党の下部組織である。所属する青年たちは多くのボランティア活動を通じて、国を支えることに貢献しているという。ビエンチャンでの最初の表敬訪問先はユースユニオンであった。コーディネーターのジュイさんもそのメンバーで、その後の訪問先でも多くのユースユニオンの方々が温かく迎えて下さった。

ラオスの印象

ビエンチャンの街は清潔で静かで、行き交う人々は穏やかであるため、「途上国の中でも貧しい国」という負のイメージとは合わない。これがなぜだろうということをおは青年たちと共に滞在中考え続けることになった。本事業では訪問国に到着後すぐに日本国大使館、JICA、JETROなどの方々から訪問国について学ぶ機会があるが、今回はASEANサミットへの諸機関の対応の都合で、研修の初めでなく中盤でこのような機会を頂くことになった。前半に見聞きしたことについて私たちがなぜだろう、どうなっているのだろう、と不思議に思い続けていたところに、専門家の方々の非常に示唆に富むレクチャーを受けて納得することが多々あったのだが、これを最初でなくて中盤で受けることができたのは、自らが見たものについて思考を深めるためにはむしろ良かったと私は感じた。

例えば「ビエンチャンにはスラムがない。なぜだろう」という問いを述べた青年に対しては、JETROの山田健一郎氏が、ラオスの人々は豊かな森に支えられ基本的に農業で食べていける。近年は若者中心に現金収入を得ようとする動きもあるが、その場合ビエンチャンには都市としての魅力が不十分でタイまで出てしまう。その結果、ラオスにはないスラムが、タイにはあると教えて下さった。また、冒頭の静けさの要素としては、車のクラクションを鳴らす習慣がほとんどない、温和な人が多く争いを好まない、ということだった。それが職場では労働争議がほとんどなく、気に入らないと離職する、という行動につながってしまう、という面もあるという。

街の清潔さについては、托鉢をする僧侶たちが毎朝素足で街を歩くので、人々がしょっちゅう箒で道を掃き清めている、という指摘とともに、ラオスの人々にこのような内なる規律がある理由が何だと思うか、彼らの信仰の在り方を、庶民が早朝に托鉢にのぞむ様子を見るように、というアドバイスを日本国大使館の大西英之参事官から頂いた。

また、ホームステイから戻った青年たちは口々にラオスの人々が家族や親せきをととても大切にすることに感銘

を受けたと述べていた。2泊ではあったが、温かい絆の中でもてなして頂き、特にパーシーという祝福を受けた時に温かい気持ちになったことが忘れられないという青年もいた。途上国であるラオスの未来に向けて何かできることはないか、と考えていたのに、ラオスの人々の心の豊かさに触れて、むしろ日本の未来はどうなるのだ、と自問した体験は得難いものだったのではないだろうか。

「援助を考えるときに正義＝善とは限らない」と言われた大西参事官の言葉を何度も反芻している青年もいた。援助は果たしてラオスの人々を真の意味で豊かにするのだろうかという彼らの疑問も何度か耳にした。本交流事業のOGであるIV-JAPANの富永幸子代表の、途上国援助にかけ一途な生き方には青年だけでなく私も圧倒された。

それぞれがラオスでの体験を未消化のまま抱えて帰国したわけだが、これからそれらとどう向き合っていくかで、この事業に参加した意味が変わってくるのだろうと自分自身のことも含めて考えている。

ディスカッションの達人に

ここでは、本交流事業を通じて達成できることの中で私が特に魅力を感じる点を述べたい。それは7月の事前研修から9月末の帰国後研修までの一連のプログラムを通じて、外国人との英語によるディスカッションの方法を習熟できることである。事前研修では、最初にディスカッションの種類、目標を常に意識して雰囲気大切にすることの重要性、話す姿勢と聞く姿勢、まとめ方などが具体的に述べられた講義を受け、次にグループワークでの少人数の練習を行い、団別研修の中ではラオス・カンボジア・モンゴルの人々とのグループディスカッションも経験できた。

さらにビエンチャンでは、日本への訪問を控えるラオス青年たちと互いの国について紹介し合い、ルアンパバーンの大学生たちとも昼食を取りながら自分たちの専攻や関心を持つ分野に関する話を話した。ビエンチャンに戻ってからラオス国立大学のLaos-Japan Human Resource Development Instituteで行われたJapan-Laos Youth Leaders Forumでは、文化と環境にテーマを定めて、本格的な議論を行った。ファシリテータのB. Southichak氏のリードがすばらしく、ice breakingのためのゲームや文化交流のダンス、餅つき大会をはさみながら、2日間で議論をまとめて最後に提言のかたちで発表をするところまでつなげた。議論の相手として選ばれていたラオス青年の中には、英語力が高く、中学生ぐらいからリーダーになるべく教育を受けている者たちもいた。日本青年たちはTOEICのスコアなどで測られる英語の能力が高くても、実際に使う機会が少ないこともあり、最初は物怖じしていたが、伝えたいことさえはっきりして

きたら、どんどん英語を用いて話せるようになっていった。そして、話す内容の事前準備こそが大事だということを理解し、その後のディスカッションに向けても抜きなく準備を進めるようになり、目に見えて力を付けていった。



ラオスのもち米を使って餅つき大会

環境問題の議論においては、今の開発の在り方が水力発電、鉱山開発、プランテーションといった、豊かな森林資源を切り崩していくことへの懸念を抱き、ディスカッションの「練習」ではなく、交流の「実践」として、ラオスの人々に伝えたい思いを必死で発言している日本青年たちの姿に胸が熱くなった。

帰国後研修では、ラオスだけではなくドミニカ共和国、リトアニア、オーストリア、バーレン、パプアニューギニアの青年たちとの英語のディスカッションプログラムがあり、異なるバックグラウンドの人々や、ネイティブ並みの英語力で押しの強い人々との意見交換の難しさに悲鳴をあげながらも、度胸を付ける体験をしていた。伝えたいことさえあれば、準備さえしてあればディスカッションは楽しめる、ということを経験できた青年たちは本当に恵まれていると思う。これからもディスカッションの達人になることをめざして切磋琢磨してほしい。

最後に

ラオス派遣団はお腹を壊すからとにかく体調管理に気を付けるようにと、出発前にいろいろな方から何度も言われたが、ほとんど大きな病気も事故もなく元気に帰国できたことは幸いであった。日本とラオスのコーディネーターの方々の御配慮のおかげだと思ひ、青年たちも注意して自己管理をしていた。同時にラオスの衛生事情が

以前より良くなってきているという面もあるかもしれない。

個人的には悠々と流れるメコン川と鳥肌がたつほど多様性の豊かな自然、そこから食卓に届くおいしい山菜やもち米、そして信仰に厚く、互いを大切にするラオスの人々に魅了されながら18日間を過ごさせていただいた。このプログラムに参加させていただきお世話になった内閣府の皆様、（一財）青少年国際交流推進センターの皆様、現地の関係者の皆様に深く感謝いたします。